

基本レベルと基本語彙について（一）

その他のタイトル	A Study on Basic Level and Basic Vocabulary
著者	沈 国威
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	54
ページ	A3-A25
発行年	2021-04-01
URL	http://doi.org/10.32286/00023723

基本レベルと基本語彙について (一)*

沈 国 威

A Study on Basic Level and Basic Vocabulary

SHEN Guowei

Although basic level and basic vocabulary are key concepts in cognitive linguistics and vocabulary acquisition, existing studies do not adequately describe the nature of and correlation between these two concepts. This paper aims to address this issue by first breaking the concept category into two types: (i) one thing with one name and (ii) one thing with many names. Second, the paper analyzes the characteristics of prototype effects and the hierarchy of different types and, finally, discusses the basic level and lexical items at the basic level.

キーワード：自然種 (natural kind)、人工物 (artifact)、人為類 (artificial kind)、
プロトタイプ (prototype)

* 基本レベルと基本語彙は、それぞれ認知言語学と語彙学習において重要な概念である。しかし両者の本質とその関連性について明晰に整理されているとは言いがたい。田中牧郎らの基本語化に関する一連の研究に触発され、筆者も近年「近代漢語の基本語化について」(中朝韓日文化比較研究叢書『日本語文化研究』第5輯2018年)、「詞彙の体系與詞彙の習得」(『東北亞外国語研究』2018年第2期)、『漢語近代二字語研究——語言接觸與漢語的近代演化』(華東師範大学出版社2019年)、「基本詞彙與基本詞彙化：詞彙体系的近代重構」(内田慶市編著『言語接觸研究の最前線』2020年)などを発表した。統一した視点で考え方をもう一度まとめようと思ひ本稿を起こした。当初、以下のような構成を予定していた。

○、緒言；一、概念カテゴリーの類別；二、プロトタイプと概念カテゴリーの階層；三、基本レベルとそこに位置する語彙項目；四、基本語彙について；五、結び；

しかし、筆を進めていくうちに、原稿が膨れあがり、3倍ほどの量になった。そこで第二章までを第1回として、第3章以降は、次号に回すことにした。

緒言

人間は感覚器官で自然界の森羅万象を感じ、頭の中で映像 (image) を形成する。目を閉じてても映像が脳裏に浮かんでくる。似ているもの、或いは同類のもの映像が——全く同じものが存在しないと断言してもよいので、映像も完全に同じではあり得ない——幾度も繰り返されるうちに対象物の輪廓が取れ、より抽象的なイメージになる。つまり映像が概念化するのである。人間が言語を用いてコミュニケーションを行う場合、話者は概念を代表する音声を発し、聞き手はその音声に刺激されて自分の脳裏に映像を再現させ (即ちソシュールの「聴覚映像」、話者が表現しようとする概念を理解する。ソシュールは、概念の知覚を喚起する音を「能記」(signifier) と呼び、音によって喚起された概念を「所記」(signified) と呼んでいる。即ち「語」である。

つまり言語音は私たちの頭の中で映像を再現することができる。このように似ている、或いは同類の事物が重ねられ、輪廓化された映像が「概念カテゴリー」(「認知カテゴリー」とも) と呼ばれる。概念カテゴリーは、ほかの概念カテゴリーと峻別される場合もあれば (例えば「魚」と「犬」は異なる)、外側にも内側にも明確な境界がなく、連続したグレーゾーンが存在する場合もある (後述する cup と bowl のように)。一つのカテゴリーを他のカテゴリーと区別したり、概念カテゴリーの内部にある類似したもの、或いは同類のものを区別したりする (例えば「コイ」と「フナ」は異なる) 必要がある。「語」は正にその重要な役割を担っている。サピア・ウォーフの言語相対性仮説を信奉する人々がある。混沌として連続体をなす自然界を異なる言語によって切り分け、命名するという「カテゴリー化」には、どんな要因が関与しているのだろうか。私たちは次の2つの問いに答える必要があるだろう。つまり一、カテゴリー化はどのように実現されたのか。二、「概念カテゴリー」の数量と内部構造はどのようになっているかである。本稿は筆者なりの答えを出そうとするものである。

1 語彙化と概念カテゴリーの類別

以上のように、カテゴリー化は言語による連続した自然界に対する切り出しである。その結果、概念カテゴリーの境界が確立される。これは、概念カテゴリーに名前を付けること、即ち概念カテゴリーを特定の音声形式に関連付けることによって実現したのである。概念の命名、或いは語彙化とも呼ぶ名付けの利点は、一、対象物を指示し、同類の事物から区別することである。例えば、水を飲む器を「コップ」と呼べば、形がどんなに似ていようと、「コップ」はもはや「茶碗」や「皿」ではない。二、対象物を抽象化する。例えば全く同じコップは現実世界

に存在せず、実際にあるのは、形、色、材質が異なる様々なコップであるが、個体間の違いは「コップ」という名称のもとで捨象されているとさえ言える。

(1) 語彙化の実現について

「語」は概念に対する命名であるが、すべての概念が命名されるわけではない。その言語の使用者が重要と考える概念のみが名称を獲得し、その他の概念はフレーズ、或いは説明的な句で表現される。言語の語彙体系がそれぞれ異なることは、外国語辞書では、原語と訳語が1対1の関係をしていないのがむしろ希であることを見ても一目瞭然である。ソシュール以降の現代言語理論では、言語に優劣はなく、どの言語でも表現したい概念を表現することができる¹⁾とされている。但し、表現の方法が異なる。例えば中国語にある「嫂」は、英語と日本語ではそれぞれ sister in law : 兄嫁と表現されるが、同じ概念に対して、中国語は単純語であるが、英語や日本語はフレーズまたは複合語である。言語コミュニティによって命名が異なる現象に関して、中国古代の思想家荀子 (BC. 313-286) は、次のように言っている。

(名之) 何縁而以同異? 曰: 縁天官。凡同類、同情者、其天官之意物也同、故比方之疑似而通、是所以共其約名以相期也。(それでは何を根拠として分別するのであろうか。それは天官すなわち生まれつきの感覚器官によるのである。おおよそ同類同状のものに対しては人々の天官の感じ方も同じであるから、従ってそれを他の類似したもの²⁾と比べ合わせ[一括した名辞を作っ]て通用させるのである。それがとりきめた名辞を共通にして互いに理解しあえることの理由である。)¹⁾

つまり、同じものになぜ違う言葉が宛がわれたのか。人は「天官」(感覚器官)で森羅万象を感じて、同じコミュニティの、或いは同じ感情を持っている者なら、彼らの天官は対象物に対する感じ方も同じであろうから、音声による事柄の模倣や喩え方も似通ったりするので、共有できる名称でコミュニケーションを行うことが可能となる。しかし、これは、異なるコミュニティの人や同じ感情を有しない人なら、自然界に対する感じ方が異なるため、言語も異なり、意思疎通ができないことを意味しているのだらうか。必ずしもそうではない。サピール・

1) [清] 王先謙撰『荀子集注』北京: 中華書局、1988年415頁。日訳は金谷治訳注『荀子』(岩波文庫169頁)による。但し波線の部分は、「おおよそ同じコミュニティの者ならものの感じ方も同じだから、(音声による)事柄の模倣や喩え方も似通ったりするので、互いに約束した名称でコミュニケーションを行うことができる」としなければならない。『左伝』に「非我族類、其心必異」とある。同じ発想であらう。

ウォーフの「言語決定論」は、異なる言語が異なる方法で概念を分割するので、言語が自然界に対する私たちの認知方法を決定するとしている。即ち言語が異なれば、同じ対象物であっても、概念カテゴリーが異なるということである。いわゆる「異なる」とは、カテゴリーの大きさ（即ちカテゴリー間の境界、カテゴリーの内部に含まれるメンバーの多寡）や内部構造が異なるということである。これは何も自言語と他言語の間だけの問題ではなく、同じ言語であっても通時的に異なる。これは外国語翻訳の体験を必要とせずとも、中学校の国語の授業で古文を現代語に訳す時の難しさを思い出せば納得できる。しかし、昔の人と今の人、さらには異なる言語を話す人々が交流し、理解し合うことができるのも、厳に存在する事実である。これは、概念カテゴリーは共時的に比較的安定しているが、カテゴリーが形成されてからも、絶えず調整が加えられ、少しずつ新しいカテゴリーに変容していくことを意味する。この過程を筆者は「再カテゴリー化」と呼ぶ。古今東西の人間が互いに理解できるのは、一方では人間が生物学、社会学上の共通の基盤を持っているからであり、他方では社会進歩、異文化交流、言語接触などによって導入された新しい概念を再カテゴリー化した結果である。これは近代において特に顕著である。王力は20世紀初頭に急増した中国語の新語、訳語に言及した際、次のように指摘している。

現代漢語新詞の大量増加、使漢語大大地豐富了它的詞彙、而且使詞彙走向完善的境地。我們說豐富了、是因為產生了大量新詞以後、任何複雜的和高深的思想都可以用漢語來表達；我們說完善了、是因為詞彙國際化、每一個新詞都有了國際上的共同定義、這樣就能使它的意義永遠明確嚴密、而且非常鞏固。（現代中国語における新語の大量の増加は、中国語の語彙を大いに豊かにさせ、完璧な境地に向かわせた。豊かになったと言うのは、大量の新語が生まれたため、どんなに複雑で高度な思想も中国語で表現できるようになったからだ。完璧になったと言ったのは、語彙が国際化され、すべての新語が国際的に共通の定義を持つようになったからだ。このように、語の意味がどんな場合でも明確かつ厳密で、しかも非常に強固なものになった。)²⁾

訳語の創出と語彙体系への編入は、まさに再カテゴリー化の実例である。中国語にはもともと存在しなかった概念が導入され、語の形が取得されたこと自体が、中国語固有の意味体系を改造したことになる。現在「国家、政治、経済、科学」など近代のキーワードと呼ばれる多く

2) 王力著『漢語史稿』北京：中華書局、1980年528頁。日訳は筆者による。

の抽象語は、王力の言う「国際語」の特徴を持っている。世界的にはほぼ同じ外延と内包を持っており、周辺の意味が希薄である。

以上、語彙化一般について述べてきた。対象物と語の関係によって「命名」という言語行為は2種類に大別できる。これはまた概念カテゴリーのあり方にも関連する。以下それぞれ見ていきたいと思う。

(2) 一物一名型：同位集合カテゴリー

それでは、概念カテゴリーの形成と命名について少し具体的に見てみよう。

昔の人は、まず生活環境に生息する空を飛ぶ小動物を目にする。その鳴き声や形状によって「雀、鳥、鷹、鳩、鶯、鶴、雁、雉、鶏……」と名前を付けていくが、³⁾ やがてその共通した特徴に着目し、より抽象的なイメージを造り上げ、「鳥（トリ）」と命名する。魚、馬、樹、草などの自然種（nature kind）と呼ばれるものは大抵同じプロセスを経て、概念カテゴリーを形成し、命名されるのである。このように個→種→類へと収斂されていくのがまさしく人間の認知能力が発達した結果であろう。但し概念とその名称の枠組みが一旦形成された後、認知の順序、例えば幼児の語彙習得が、個別の種（スズメ）からではなく、より抽象的な類（トリ）からスタートすることも考えられる。とりわけ成人が外国語を学習する場合である（第3章詳論）。

ところで、異なる概念カテゴリーが如何に命名によって区別されるかについて、荀子は、次のように述べている。

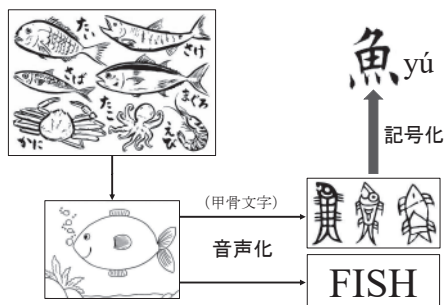


図1. イメージ→概念→語=概念カテゴリー (中国語と英語)

同則同之、異則異之、(中略) 知異実者之異名也、故使異実者莫不異名也、不可乱也、犹使異(同?) 実者莫不同名也。(同じものには同じ名称、違ったものには違った名称をつける。[中略] 実際の対象事物が違っていればすべて必ず名称も違えるのであって、それを混乱することのできないのは、ちょうど実際の対象事物が同じばあいにはすべて必ず名称も同じにさせなければならないようなものである。)⁴⁾

3) その前段階に個々のスズメを種としてのスズメにまとめ上げる認知作業がある。

4) [清] 王先謙撰『荀子集注』418頁。日訳は前掲金谷治訳注『荀子』170頁。

荀子は、同じものは同じ名前呼び、違うものは違う名前と呼ぶとし、混乱してはいけないと主張している。筆者はこのような概念カテゴリーを「一物一名」型と呼ぶ。これは図らずもギリシャの古典的カテゴリー観に合致するものである。J. R. テイラーによれば、古典的カテゴリー観には次のような特徴がある。

1. カテゴリーは必要かつ十分な素性の連言 (conjunction) によって定義される。
2. 素性は二項的 (binary) である。
3. カテゴリーは明確な境界を持つ。
4. カテゴリーのすべての成員は同等の地位を持つ。⁵⁾

このようなカテゴリー観が長きにわたって正しいものとされてきた。古典的アプローチは、カテゴリーが成員らしさを決定する必要十分条件の集合によって定義され、あるものがあるカテゴリーに「どの程度」属するのかを問うことは無意味であり、属するか、属さないかのいずれかであると主張する。(テイラー84頁) しかし古典的カテゴリー論が取り上げたのは、自然種だけなので、その適用範囲も自然種に限られるべきである。⁶⁾ 自然種に関しては、カテゴリー「カラス」や「スズメ」などが有限個の素性によって定義されうる。個別種としてのカテゴリーは、他の同類のメンバーと一緒に「鳥」という上位カテゴリーを共有していながら互いに区別されている。つまりカラスかスズメかという二者択一のテーゼである。⁷⁾ 全てのメンバーに、それを規定する定義が存在し、そうして規定されたメンバーは均等の資格をもつ。(図2参照) 筆者はこのような同位関係にあるメンバーの集合を、「同位集合カテゴリー」と呼ぶ。同位集合カテゴリーは、一物一名型である。

しかし、現在の人間社会ではこのような自然種だけではないどころか、むしろ人間によって

5) ジョン・R・テイラー著『認知言語学のための14章』(第3版)、辻幸夫ほか訳、紀伊國屋書店、2008年45-46頁。

6) テイラーの原著では、1-3について補足的な説明がなされたが、4は、自明と思われるのだろうか、説明はない。原著に All members of a category have equal status とあるから一つのカテゴリーの中にあるすべてのメンバーという意味になるが、筆者は The members of all categories have equal status. 即ち、(同種類に属する) すべてのカテゴリーは同等の地位を持つとすべきではないかと考えている。

7) 『認知言語学のための14章』に「鳥」のような自然種の用語は、世界の中に実在する現象に対応し、その現象の内部構造によってカテゴリー内の対象の範囲が決まってくると考えられている。もしこれが正しければ、自然種カテゴリーは明確な境界線を持ち、カテゴリー内の成員に成員度の差は見られないと予想される。」とあるが(84頁)、筆者は、この「鳥」を「スズメ」、もちろん「カラス」でもよいが、に改めて初めて正しい言説になると考えている。

造られた、或いは手を加えられたものに囲まれている（以下、「人工物」と呼ぶ）。人工物は、同じ名称の下でも形状、材質、サイズ、色彩など種々の面において多様性を示している。これは時代の流行や奇を衒う人間の心理に起因するものである。古典のカテゴリー観の不備は実は適用範囲を自然種から人工物まで推し広めたことによって招かれた破綻である。ラボフの cup; mug; bowl; vase に関するかの有名な実験結果を

持ち出すまでもなく、中国古代の思想家、孔子（BC. 551-479）はすでに「觚不觚、觚哉！ 觚哉！」と嘆いている。⁸⁾ ラボフの試験に示されているように、cup か mug か bowl か vase かは必ずしも明確な境界線がなく、むしろ、カテゴリー同士が互いに少しずつ重なり合っている。

一方、人間はある目的のために異質なものを関連づける。例えば、東洋では筆、墨、紙、硯を用い、書を認め、机、椅、櫃、床を使って生活する。個々のものは、形状、材質、用途上に、必ずしも共通した素性を持ち合わせていないが、所定の目的の為に集められ、「文具」「家具」といった名称に抽象化される。哲学者ヴィトゲンシュタインの、ゲームを例に提唱した家族近似性が有名である。氏の主張によれば、家族近似性を有するものは、一部では共通性もちつつも境界が不確定な要素の集まりである。⁹⁾ ゲームや武器、道具などのカテゴリーにあるメンバー

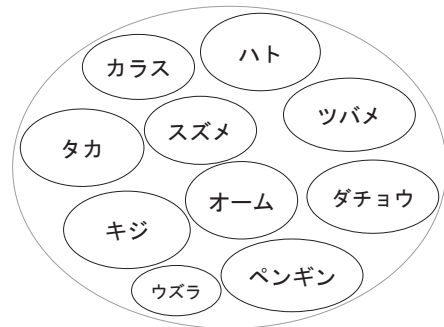


図2. 自然種



図3. 上海博物館に展示されている觚（筆者撮）

8) 『雍也第六 25』「觚には角があるものだが、この觚には角がない。角のない觚が觚だろうか。角のない觚が觚だろうか。」（下村湖人『現代訳論語』池田書店1956）孔子は、礼器の「觚」が伝統に従って造られていないことへの不満を述べている。

9) 大堀壽夫著『認知言語学』、東京大学出版会、2002年31-32頁。

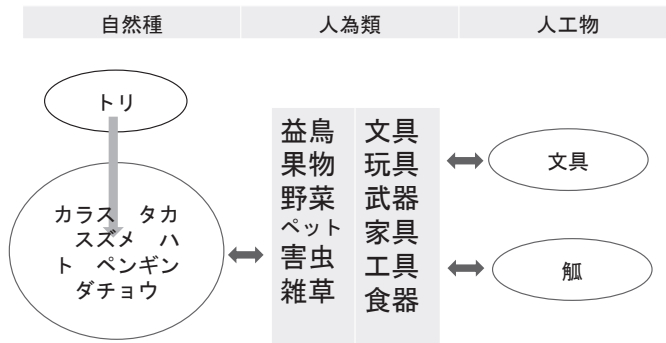


図4. 人為類の発達

全員に共通する特徴ははっきりしないが、とはいえ、共通の上位カテゴリーを有する集合である。筆者はこれを人為類と呼ぶ。自然種であっても「果物」「野菜」のように人間によって類としてまとめ上げられるケースがある。自然種も人工物も

人為類によって、再編、細分されることが可能である。

実は、中国では早くも下記のように漢字によって自然物と人工物の分類と集結を行ってきた。

- 自然種：鳥、魚、虫、樹、草
- 人工物：皿、車、器、具

上記の例の場合、同類のものは、共通した旁が用いられている。

「一物一名」は荀子が「同じものは同じ名称で、違うものは違う名称にすべし」と言うように古くからあった。「一物一名」型の規定では、一つの言葉は意味の上で他の言葉と区別するので、これを言語の「経済性の原則」の現われだと思える人がいる。彼らは言語は同じものために異なる名称を用意する必要はないので、語彙体系の中に本当の意味での同義語はなく、せいぜい類義語に過ぎないと主張する。近代科学の発展——動植物分類学の誕生は18世紀の科学進歩の成果である——によりその傾向が一層強められた観がある。というのは、科学システムは術語の一義性を要求するので、「一物一名」の方が科学の分類に適しているからである。このように近代科学の文脈では、「一物一名」が過度に強調され（例えば国家の言語政策としての科学用語の統一作業）、現実の言語生活の実態が無視されている。科学の知識により、カテゴリーに属するメンバーの整理も行われた。例えば「鯨」は、魚偏であるが魚ではないといった具合である。

しかし、「一物一名」は語彙体系の本質的な特徴ではないと筆者は考えている。共時レベルでは、語彙体系の各構成員が語形、意味用法の面で他と区別されていることに異義はないが、この区別性は後天的に獲得されたもの、すなわち経時的な変化の結果である。

「一物一名」型カテゴリーのプロトタイプと階層性については次の章で議論する。

(3) 一物多名型：同義集合カテゴリー

認知言語学の進展によりカテゴリーに関する研究は脚光を浴びてきた。特にヴィトゲンシュタインに触発され、ロッシェらが、新しい知見を発表した。しかし分析の対象は、一物一名型に限られている。一物一名型は語彙体系のすべてを構成しているのだろうか。明らかにそうではない。一物一名は、論理的には理想的な状態であるが、語彙システムの本質的な特徴ではない。一物一名型に限定されたカテゴリー論は基本的には言語知識を反映するものではなく、むしろ文化地理的要因に影響される百科知識を映し出しているものといわざるを得ない。人間は社会的な動物であり、言語によるコミュニケーションは人間社会の最も基本的な活動である。そのため利用者は言語が他の社会構成員にどのように影響を与えるかを積極的に考える必要がある。端的に言えば人間は同じものを別の名前で呼ぶ「一物多名」を好む傾向がある。¹⁰⁾ まず、「一物多名」型の概念カテゴリーの実際を確認しておく。

表 1

妻	家内、女房、嫁、嫁さん、奥さん、夫人、ワイフ、細君、愚妻、連れ合い
改める	1、改変、変更、更改、変える、換える；2、改正、修正、更正； 3、修改、改進、改善、改良、改革、改造
大きい	巨大、偉大、宏大、膨大、碩大、広大、高大、莫大

婚姻関係は、男女によって形成される。日本語では女性が属する概念カテゴリー WIFE (英語の大文字は当該の概念を表す) に「妻」という語が実在する。それだけではなく、「妻」のほかに「家内、女房、嫁、嫁さん、奥さん、夫人、ワイフ、細君、愚妻、連れ合い……」などの語もある。概して社会性を有する名称が一物多名の傾向が顕著である。

日本語では形容詞の同義語は、「大きい：巨大……」のように和語と漢語が対応する形で実現されているのが特徴である。明治期に入ってからいわゆる漢語系形容動詞が急速に整備され、今日の形になった。漢語系形容動詞の加入により、より精密な言い分けと多彩なコロケーションが生まれた。

日本語では動詞の同義語は、「まなぶ、ならう；さがす、みつける；つかう、もちいる」のように和語の内部においてないわけではないが、¹¹⁾「ならう：学習」のように漢語サ変動詞の語幹

10) これは荀子の「同則同之，異則異之」という主張を否定しているようだが、実はそうでもない。荀子も一字語と二字語の意味上の同義性に注目した。沈国威『漢語近代二字語研究』華東師範大学出版社、2019年参照。

11) 日本語の動詞には、「開く：開ける」のような自他対応のペアも多数存在している。

と対応する形が普通である。漢語サ変動詞も形容動詞と同様、明治期、特に明治20年代に入ってから急ピッチで整備された。¹²⁾ これは、『言海』（1888-1891）から『大言海』（1932-1935）までの国語辞典での収録状況を時系列に沿って観察すれば明らかである。漢語サ変動詞の加入により、動作に対する言及が精密になり、コロケーションも豊富になった。

どの言語にも同義語、あるいは類義語と呼ばれるものがあるが、従来の語彙研究では、同義語を認めず、概念的意味が等しく、周辺の意味が異なる類義語として扱われる向きがある。しかし、語彙体系は、周辺の意味を表すために類義語を用意したのではなく、種々の経緯によって同義語が生じたため競合、棲み分け作用が働き、機微のニュアンスを表すようになったという結果論が筆者の基本的な立場である。言語の本質は「一物多名」であると筆者は考えている。「一物多名」は、異なる文脈条件、即ち時間、空間、対象、目的、媒質などの条件のもとで言語表現を行うために必要な性質である。選択肢の存在を必須条件とするレトリックにとって「一物多名」は欠くことのできないものである。「種々の経緯」とは、基本的に地域差と時代差を指すが、近代以降、言語の近代化にかかわる理由が生じたので、語彙体系の近代化という視点から少し略述する。

近代以降の漢字語の増加ぶりには目を見張るものがあった。明治期の新語は、學術用語が中心であるが、二字漢語形式の形容動詞、サ変動詞の語幹も夥しい数に上る。これは近代的語彙体系の構築に当たって、下記のような原則を貫こうとしたためと思われる。

- ① 新しい概念は、二字漢語で表現（或いは訳出）する；
- ② 既存の概念を表す和語に二字漢語を宛がう；

筆者はこれを「和漢相通二字語の原則」と呼ぶ。特に②は、漢語系形容動詞、サ変動詞語幹の増加に繋がった。和漢相通は、近代以降の語彙現象として、その動機付けには主に以下のようなものがあると考えられる。¹³⁾

一、主に言語社会の変化、特に異文化・異言語との接触によってこれまで存在しなかった、或いは区別しなかった状態、事態を表し、精密に区別する必要性が生じた。例えば「駐在、滞在；駐車、停車；学習、習得」「敏感、過敏」などである。明治後期に大量に発生した「-的」付きの語がこの延長線上にある。

12) 形容動詞と漢語サ変動詞語幹の発達については、前掲沈国威『漢語近代二字語研究』（2019）参照。また周菁氏の博士学位論文『日本近代二字形容詞の形成——基于詞彙近代化視角的考察』（2019年関西大学）と楊馳氏の博士学位論文『近代二字漢語動詞の形成與發展——基于中日語言接觸及詞彙近代化視角的考察』（2021年関西大学）もそれぞれこの問題を集中的に取り上げている。

13) 沈国威「近代漢語の基本語化について」日本語学会2017年秋期大会（金沢大学）予稿集。

二、これまで漢文脈、和文脈と峻別された文体が、新たに近代的漢字仮名まじり文体へと成立していく過程で、韻律特徴（例えば×訪日本、×訪問米などの表現ができない）を含む文体的統一性を与える必要性が生じた。同義の和語がすでに存在しているにも拘わらず、「簡単、優秀、正確」；「援助、拡大、期待」などが新作されたのがその表れである。

三、近代学校制度の確立により、教育が普及し、漢字だけではなく、英語知識も一般民衆へと浸透していく。そのため、紋切り型の表現に満足せず、言語表現の多様化を追求する必要性が生じた。これが同義語群の発達に繋がる。例えば「優れる、優秀、抜群、卓越；大切、大事、重要」などの場合である。

異なる「語種」、或いは「出自」に由来する同義語群の存在は、日本語の大きな特徴である。挙例するまでもないが、現代日本語では、名詞は「和＝漢＝洋」のセットが多く、動詞と形容詞は「和＝漢」が同義の場合多い。言わば、同じ概念を日本語の固有語で表すこともできるし、漢字語や西洋の外来語で表すこともできる。和漢相通の現象は、昔からあったと考えられがちだが、筆者の最近の研究では、むしろ1890年代（明治20年代）に入ってから和漢の対応が徐々に実現したのである。¹⁴⁾ 近代語研究の課題として、元々大和言葉があるのになぜ漢語系の形容動詞、サ変動詞が新たに必要かという質問に答えなければならないが、筆者は、上述の原因のほか、科学叙述と言文一致からの要請も重要な一因だと考えている。「科学叙述」とは、科学について語ることで、その最も典型的な場合は、教室といった空間で、自然・人文科学の知識を講述する教師と耳で聴いて理解する学生によって構成された言語活動を指す。一方「言文一致」とは、科学をめぐる「講述」と「聴解」の緊張関係がその最も本質的な部分であると考えられる。¹⁵⁾ 科学叙述と言文一致を実現させるには、語彙面において、学術用語の創出と動詞、形容詞という叙述語の整備という二つの問題を解決しなければならない。学術用語は新しい概念を表し、叙述語は、科学叙述の枠組みを担う。叙述語は新しい概念を表すものも少なくはないが、既存の和語等に同義関係を持つ漢字語を提供するのを目的とする語がかなりの比重を占めている。例えば「改める」に対し、「改良」と「改善」の2つの語が存在する。この二語は、意味、語構成、構成成分がほぼ同じである。なぜ語彙体系にその両方が必要なかを問うのは無意味ではない。近代以降、言語活動において、内容より形式の重要性が増してきたことが指摘できる。国語教育と外国語教育の現場でしばしば問題になっている「学習語彙 (academic word)」は、筆者が提起した近代語彙の「和漢相通」と密接な関連性がある。¹⁶⁾

14) 沈国威前掲『漢語近代二字語研究』を参照。

15) 沈国威「言文一致の語彙的基盤」、『中国文学会紀要』42号、2021年「内田慶市退官記念号」1-27頁参照。

16) バトラー後藤裕子『学習言語とは何か：教科学習に必要な言語能力』三省堂、2011年参照。

「和漢相通」は、近代日本語の特徴であるが、中国語では、同じ概念を一字語でも二字語でも表現できることが求められる。つまり、中国語は同じ概念のために一字語と二字語の2つの長さの異なる語形を用意する必要がある。具体的には、一、新しい概念は二字語で表現すること。二、既存の概念を表す一字語には二字語を新たに用意すること（多くの場合は1組）。筆者はそれを「単双相通」の原則と呼ぶ。「単双相通」式と同義語は、五四期以降の「言文一致」運動に関連する「近代」の出来事である。日本語が、中国語が必要とする二字語の主な供給源になっていることについては、筆者の近著『漢語近代二字語研究』（2019）で詳述しているので、参照されたい。¹⁷⁾

なお、語構成上の特徴は、二字語の創出に当たって、「-大」「改-」のような日本では「軸字」、中国では「根詞」と呼ばれる成分が大きな役割を果たした。いずれ詳論したい。

以上、同義語グループについて見てきた。同義語は、言語の知識を反映するものであり、いわゆる語彙力は、正に同位語群の広さと同義語群の深さによって決定されると考える。

「一物多名」型は、プロトタイプにおいて特徴的であるだけでなく、認知面、学習面において重要な問題を含むので、解明する必要がある。

2 概念カテゴリーの階層とプロトタイプの類別

人間は個別から一般へとイメージを抽象化していく。その過程に概念の階層が形成される。階層化は、人間の認知能力の発達によるものである。一般が把握できたからこそ個別間の相違もより鮮明になる。プロトタイプの実現である。人間の認知作用はこのように下（個別）から上（種・類）へとまとめ上げるもの（帰納）と上から下へと照射するもの（演繹）との双方向の過程でなければならず、カテゴリーの階層とプロトタイプは、認知作用の対象によって、そのあり方が左右されると筆者は考える。以下、概念カテゴリーの階層とプロトタイプの類別について概観する。

(1) 概念カテゴリーの階層

概念カテゴリーは、無造作に堆積しているわけではない。認知言語学の知見によれば、すべての概念カテゴリーは、相互に関連して一種の階層構造をなしており、おおよそ図5のようにA包摂型とB分節型（全体部分型）に分類することが可能である（「樹」に関して、どちらの

17) 沈国威前掲『漢語近代二字語研究』第1章を参照。

場合も漢字に木偏が付いていることに留意したい)。¹⁸⁾

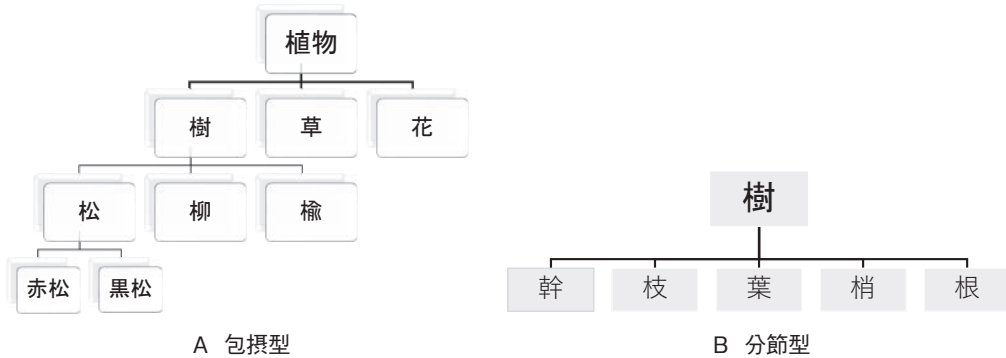


図5. 二種類の階層構造

カテゴリーに関する古典的アプローチでは、上下位構造をなすものを中心に議論が展開されていたが、中国の思想家、荀子も次のように捉えている。

故万物雖衆、有時而欲遍挙之、故謂之物。物也者、大共名也。推而共之、共則有共、至于無共然後止。有時而欲遍挙之、故謂之鳥獸。鳥獸也者、大別名也。推而別之、別則有別、至于無別然後止。(万物はさまざまに多くあるけれどもそれを総称しなければならないばあいもあるから、そのために「物」と命名するのである。「物」というのは大共名である。つまり個々の名称を推してそれを合わせて共名にし、共名になればまたそれを合わせて [さらにひろい] 共名にし、ついにはそれ以上に合わせることができなくなってそこで止まる。[それが大共名である。] しかしまた万物を一つ一つ示さなければならないばあいもあるから、そのために「鳥」とか「獸」と命名するのである。「鳥」とか「獸」などというのは大別名である。つまり一つの名称を推してそれを分けて別名とし、別名になればまたそれを分けて [さらにせまい] 別名にし、ついにそれ以上に分けることができなくなってそこで止まる。[それが大別名である。])¹⁹⁾

18) いわゆる包摂型と分節型(全体部分型)は、名詞に限定すべき分類だと考える。なお、『中国語学習シリーズ』(東方書店)の1354組の名詞の中で包摂型、即ち「▽」で示された項目は457個である。分節型、即ち「⊃」で示される項目はわずか41個である。

19) 『荀子』金谷治訳、岩波文庫青208、2017年19刷。170-171頁。



図6. 荀子の共名と章太炎の解釈

即ち自然界の森羅万象は、「遍挙（あまねく挙げる）」する必要があれば、その共通点を捉え、「共名」を与える。共名の下的事物は、更に共通点に基づき、細分していき、全く共通点がなくなるまで繰り返す。逆方向から見れば、事物を区別するものは「別名」と言い、大きい別名の下に小さい別名がある。それ以上区別できないまで繰り返す。荀子の言説に対し、文字学者の章太炎（1869-1936）は、「物は共名、獣は別名、畜は達名、馬は類名、騏、驃、騊、驪は私名である」と実例を挙げて解釈している。²⁰⁾

荀子は、上下の縦方向の体系を示してくれた。上に行けば「物」に収斂していき、下は区別が認められないところまで行き着く。上位の大分類から下位の小分類へと広がっていくカテゴリーの階層は人間の知識構造を反映するものである。ただし荀子は、各階層は重要性において同じか否かに言及しなかった。また自然界に対する認知は、共名から始まるのか、それとも別名から始まるのか、即ち階層の上下は、知識獲得の順序を反映するものかどうかとも明言しなかった。古典的カテゴリー観は、上記の点において図らずも荀子と一致しているが、²¹⁾ 現在の認知言語学では、中間に位置する層が、認知上最も重要だとされる。

ところで、これまで階層性についての分析はカテゴリーの類別等を問題にすることはなかった。上位下位の階層構造は、自然種、人工物、人為類を問わず、いずれの場合もその存在を認めることができるが、自然種は、科学分類法に示されているように最も整然たる体系を示している。科学分類法の確立は、人類の認知能力の発達、即ち科学の進歩を反映するものである。ルネサンス以降の科学革命により、人類の知識が急増し、概念の体系的整理が要請される。「分類学の父」と称されるカール・フォン・リンネによる動植物分類法やロジェの語彙分類法が正にその申し子と言えよう。とりわけリンネの動物植物分類法は、開放的な枠組みを提供し、新種が発見されれば簡単に組み込まれていく構造になっている。このような階層構造の特徴は、上位カテゴリーは、下位カテゴリーを包含し、下位カテゴリーのメンバーは同位関係にある。つまり上位下位のモデルは、名物の同位集合（一物一名）のタイプによりマッチする。

一方、動詞については、イギリスの言語学者ライオンズは次のように述べている。

一方、動詞については、イギリスの言語学者ライオンズは次のように述べている。

20) 章太炎著『国学概論・国学論衡』、北京：中華書局、2015年290頁。なお、騏（qí）は青黒色の馬；驃（liú）は赤い胴体に黒い鬣の馬；騊（guā）は黒い嘴の黄色い馬；驪（lì）は純黒色の馬である。

21) 大堀壽夫著『認知言語学』、東京大学出版会、2002年54-55頁。

Honesty may be regarded as kind of virtue and also a part of virtue. So too for many verbs denoting activities. For example, the proposition “X can sew” may be held to imply a conjunction of “X can tack”, “X can hem”, “X can baste”, etc. Each of the verbs in the set {‘tack’, ‘hem’, ‘baste’, etc.} is a hyponym of ‘sew’ and may yet be said to denote an activity which is part of the activity denoted by ‘sew’.²²⁾

世の中の万物を「物」にまとめることができるように、動詞も意味類型によって移動動詞、加工動詞、存在動詞、打撃動詞、生産動詞などに分類することができ、「する」は大部分の動詞の「共名」であると言ってもよさそうである。しかし、ライオンズの言う形容詞、動詞の下位語は明らかに「リンゴ、ナシ」が「果物」に対応するのとは異なっている。模糊とした連続体をなす事象を個別の言語によって切り出して、命名し、カテゴリー化することに関しては、名詞も動詞も同じであるが、動詞によって命名されるのは、時間軸に沿って展開されていく過程そのものの全体か、動作主、対象、方式、手段、目的、評価、結果状態などの緒要素によってスポットライトを当てられた一連の動きの一断片、或いは一側面かである。²³⁾ 実際には下記のようなケースが考えられる。

「料理する」タイプ：このタイプの動詞には、「煎る、炒める、煮る、揚げる……」などいろいろ異なる方法（いわゆる料理法）で実施する動詞が連想的に含まれるであろう。包摂型に近い。

「炒める」タイプ：このタイプの動詞には、例えば食材を加工する、火をつける、油を入れる、かき混ぜる、調味料を加えるなどのステップに分けられる。「食べる」も同じように、まず食べ物を口の中に入れて、咀嚼して、そして飲み込むなどのステップが考えられ、一般的な意

22) Lyons, John. 1977. *Semantics*, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press. pp.314-315. [正直は美德と見ることもできるし、その一部と見ることもできる。活動を表す多くの動詞についても同様である。例えば、命題「某氏は裁縫ができる」は、「某氏は tack ができる」、「某氏は hem ができる」、「某氏は baste ができる」などの意味を持つと考えられるかもしれない。集合 {‘tack’ ‘hem’ ‘baste’} の中の動詞はすべて「裁縫」の下位語であり、「裁縫」が表す活動の一部とも言える。] 文中の hem は「縁取り」と訳すことができるが、tack と baste には一般的に認められた適切な訳語がなく、「tack = (定型のために一時的に縫った) 太い縫い目、偽縫い目」や「baste = (正式に縫制する前に衣服やサンプルを固定するために) 長い縫い目で疎縫い、粗縫いする」とフレーズによる説明を用いざるを得ない。これは日本語と英語のカテゴリー化の違いによるものだが、必要があれば日本語も訳語を用意するであろう。これはつまり筆者が主張する再カテゴリー化である。

23) 言語が違えば、切り出し方も異なることは、hem、tack、baste に対応する訳語が日本語に存在しないことから明らかである。

味での「食べる」はこの一連の動作の繰り返しになる。²⁴⁾ このステップは「工程」と呼ぶにふさわしいかも知れない。分節型に近く、完全な上下構造を持たない。

形容詞に至っては、「高さ、長さ、大きさ、貴賤……」などは、あるベクトルの方向における量の多寡に帰着できる。しかし、「多い」を「高い・長い・大きい・高い」の上位語と言っても実質的な意味がないであろう。

動詞、形容詞を、上下構造に見立てにくいのは、その語彙項目の増加が名詞と異なる動機付けによるためだと思われる。名詞の増加は、新種の発見に対処する場合が多い。一方、動詞、形容詞の増加は、既存の過程、状態、性質等をより精密に表現するためである。

以上は一物一名の場合である。一物多名を、表1に従って簡単に説明しよう。

「妻」のような一物多名のカテゴリーは、章太炎が示した「馬」の例とは違って、完全な上下位の階層構造を持たないのが特徴である。もちろん「家族・親族」の下位カテゴリーと言えなくもないが、これは社会の枠組みを反映するもので、自然種の場合と異なり、上位カテゴリーが想定されたとしても、「妻」以下の下位カテゴリーが認定しにくい。

動詞と形容詞も同じである。そもそも階層性が弱い上、表1の例はいずれも言い換えの関係にあり、その一部を下位事象として記述することは明らかに不可能である。

要するに一物多名型は平面的（同位同義）である。カテゴリーの類別によってカテゴリーの階層も異なるのと同様に、プロトタイプも違う様相を呈している。次節ではプロトタイプの状況を見てみよう。

(2) プロトタイプの類別

認知言語学では、カテゴリーに関する古典的アプローチの不備を補うため、プロトタイプによるカテゴリー化の概念を導入した。プロトタイプに関して本格的に体系的な経験的研究を行ってきたのは、心理学者のエレノア・ロッシュ (Eleanor Rosch) であり、²⁵⁾ これにより、新しいカテゴリー観が確立したとされる。認知言語学のプロトタイプに関して、一般的な説明は、おおよそ次のようなものであろう。ある概念カテゴリーに複数のメンバーがいる場合、あるメンバーが他のメンバーよりも目立つ位置にある。目立つ位置にあるメンバーは典型的なメンバーで、「良い例」と呼ばれ、逆に目立たない位置にあるメンバーは非典型的なメンバーで、「悪い例」と呼ばれる。カテゴリーの中心にいる良い例が「プロトタイプ」(prototype、または「典

24) 『認知言語学入門』(第1版、池上嘉彦ほか訳、大修館書店1998)、125-126頁；同中国語版『認知言語学導論』(第2版)、112-113頁。

25) テイラー『認知言語学のための14章』81頁。

型)である。例えば、図7のように「鳥」という概念のカテゴリーの中には(正確に言えば「トリ」の下位カテゴリーとしなければならないが)、複数のメンバーがある。中国人にとって、中心に位置する「スズメ」は良い例だが、アメリカ人にしてみれば「コマドリ」(robin)こそが好例である。もちろん中国人もアメリカ人も、「ペンギン」や「ダチョウ」は悪い例になる。

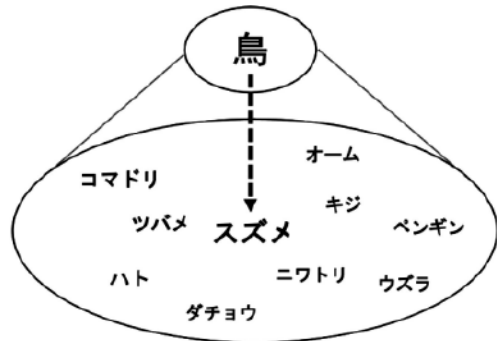


図7. 「トリ」のプロトタイプ

しかしこのような記述には幾つかの問題

点があるように思われる。(一)、自然種、人工物、人為類を区別していないこと；(二)、射程は事実上名詞に限定されており、動詞、形容詞をカバーできていないこと；(三)、最も重要な点は、一物多名型のカテゴリーを全く考慮に入れていないことである。以下、上記の問題点を押さえた上で、プロトタイプを考えてみたい。

(一)、すでに述べたように古典的アプローチは、自然種の一部しか対象にしていない。例えばアリストテレス (BC. 384-322) は、「ヒト」という種のカテゴリーを問題にし、²⁶⁾ 人か人ではないかの二者択一になり、中間的な結論はあり得ない。「ヒト」というカテゴリーにおいてすべてのメンバーはメンバー度の差が見られないので、プロトタイプが発動されない。これは、「スズメ」や「カラス」についても同じである。しかし、人間は個々のイメージを抽象化し、種としてまとめ上げる認知能力がある(人間に限らず、恐らくすべての生物が有する能力と思われるが、人間だけが言葉を持つ)。それだけではなく、スズメ、カラス、ハト、タカといった実在の自然種から共通した素性を抽出し、実在しない「トリ」という上位のカテゴリーまで造り上げることができる。スズメからトリへの抽象化は、種を超えたもので、認知能力の飛躍を意味する。その際、辨別的素性の多くが捨象され、際立つ特徴のみ抽出される。「トリ」は、下位の自然種から素性を吸い上げてくる以上、下位の自然種同士はどれだけ素性項目を分かち合えるかによって、プロトタイプが形成される。従って科学的に厳然たる上位下位の構造を持つ自然種の場合のみ、上位概念カテゴリーに対し、下位概念カテゴリーのメンバー間においてプロトタイプ上の差があり、そしてプロトタイプ効果が最も高い。

しかし、筆者がここで強調したいのは、ペンギンやダチョウなどの周辺メンバーがプロトタ

26) ボーニッツ著、藤井義夫訳『アリストテレスの範疇について』岩波書店、1930。

イブではないのとは異なり、ツバメがスズメよりもトリのプロトタイプになり得ないのは、辨別素性、とりわけ素性の多寡といった要因だけではないということである。上位概念カテゴリーと下位概念カテゴリーのうち、最も短い距離で結びつけられるものは、プロトタイプであるが、距離の長短や連想的反応のスピードは、文化地理的な要素に左右される。

なお、言葉によるパラフレーズには下記のような表現が可能であろう。

- ① スズメは最もトリらしい。
- ② トリといえば、スズメだ。
- ③ ペンギンよりスズメのほうがトリらしい。

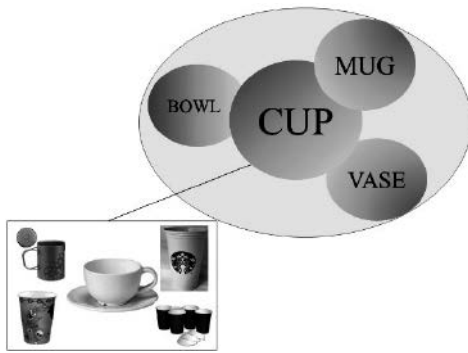


図8. 人工物のプロトタイプ

言語的には、「スズメ、コマドリ、ペンギン」などの下位集合の名詞はすべて「トリ」の下位異義語であり、語義は互いに区別され、言い換えることはできないが、「XXは鳥の一種である」と説明することはできる。したがって、「スズメ」はトリの下位カテゴリーのプロトタイプではあるが、他のメンバーの代表ではないことに注意する必要がある。

一方、人工物の場合は、「觚」のように同じ名称の下に異なる形状、材質、サイズ、色彩のものが集まってくるので、どうしても「らしさ」が付きまとう。またcup、mug、bowl、vaseのように境界線が必ずしも鮮明でない場合が多い（図8参照）。プロトタイプは、単独のカテゴリー、例えばカテゴリーCUPだけでも確認できる。複数の個体について最もそれらしいものはどれかという質問はできるが、上位カテゴリー、例えば「食器」に対して、最も食器らしいものは何かと尋ねても一致率の高い答えは期待できないかもしれない。

人工物に関する言語表現としては、次のようなものが考えられよう。

- ④ どれが最もコップらしいか。
- ⑤ コップは食器である。
- ⑥ コップといえば、景德鎮の青花磁が思い出される。

ところで、自然種にせよ人工物にせよ、人間によってある目的のために集められたのが、人為類である。言わば人間による、人間のための人為的な集合である。人為類に属するメンバーにはそもそも共通した特徴が存在せず、従って上位カテゴリーの名称、即ち「類名」に対して、下位種のメンバーには認定上にばらつきがあり、目的以外に共通項が存在しない場合も多い。グローバル化が進む今日、「果物」「野菜」

「家具」「文具」「食器」「ペット」など多くの概念カテゴリーは言語を跨ぐ普遍性を帯びてきた。それでも当該カテゴリーでは中心メンバーにどんなものがあるかという設問に、上位回答が高い一致率を示すだろうが、下位回答は文化地理的な差が顕在化すると予想される。²⁷⁾

人為類については、次のように言及されるであろう。

- ⑦ 中国では、文具といえば毛筆だ。
- ⑧ 消しゴムも修正液も文具である。

それでは、整理してみよう。

- (ア) 自然種：類と種の上下位の枠組みにおいて、プロトタイプ効果が顕著に存在する；
- (イ) 人工物：下位カテゴリーの種だけの場合でもプロトタイプ効果がある；
- (ウ) 人為類：人間がある目的のために造り上げた上位カテゴリーであるので、自然種も人工物も下位カテゴリーとして編入され得るし、プロトタイプ効果も存在する。

(二)、一物一名型のカテゴリーにおいてプロトタイプ効果が最も顕著に現れたのが上下位構

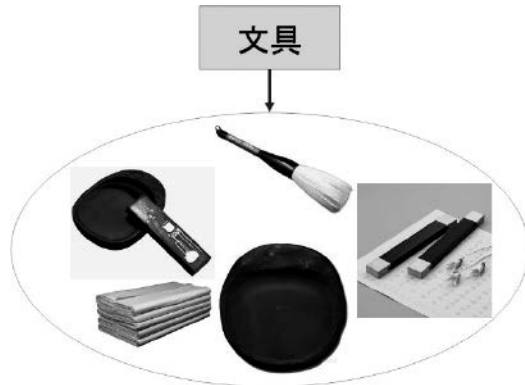


図9. 人為類とプロトタイプ

27) 人為類の項目に関して、アンケート調査によってプロトタイプの実態を浮き上がらせる手法、例えば、一覧リストに文具と思う項目にチェックを入れ、チェックの数によって順位を付け、家具のプロトタイプが完成する、が採られる。テイラー『認知言語学のための14章』82-83；102-103頁。

造を有する自然種である。ゲーム、家具といった人為類のタイプは、ゲシュタルトが形成されないことからプロトタイプ効果も弱い。動詞と形容詞のプロトタイプに関しては、短い物語に含まれる陳述が、どの程度嘘をつくという行為の例に見なされるかという Coleman and Kay (1981) の考察や動詞 EAT、KILL、WALK、形容詞 TALL などに見られるプロトタイプ効果が報告されているが、²⁸⁾ 動詞、形容詞そのもののプロトタイプというより、外部世界の出来事に引き起こされた連想的イメージに過ぎない。中国でも形容詞に関して「四大緑」「四大喜」のようなギャグがあるが、²⁹⁾ もはや言語そのものの研究ではない。

(三)、前節では、同位集合と同義集合という2つの概念カテゴリーのタイプを見てきた。カテゴリータイプ別にそれぞれ類型のプロトタイプも異なる様相を呈していると予想されるが、これまでの認知言語学の研究では、そのうちの1つ、つまり同位集合しか言及していなかった。これにより、プロトタイプに関する言説は、認知パターンの探求であっても、認知の、或いは認知論に基づく言語そのものの研究ではないという問題が存在している。それでは、「一物多名」型の概念カテゴリーにおいてプロトタイプが、どのようなものか、その特徴を見てみよう。

名詞：婚姻関係にある2人のうち女性のほうを指す言葉に、図10のように「妻」のほか「女房、嫁、家内、奥様……」などが多数存在している。一物多名は一物一名タイプと違って、「リングは果物の一種だ」、或いは「鳥には雀が含まれている」というように、「女房は妻の一種だ」

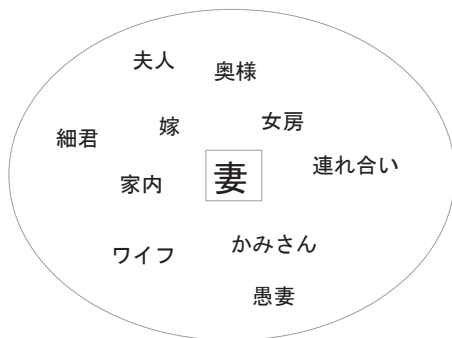


図10. 名詞のプロトタイプ

とか「妻には女房が含まれている」と言うことができない。また(中国人にとって)「雀」は典型的な「トリ」だと言えるが、「妻」は典型的な WIFE とは言えない。その代わりに「女房はつまり妻(の話し言葉)である」と言うことができる。実はこれが国語辞典でよく使われる言い換えによって解釈する方法である。³⁰⁾ 概念カテゴリー WIFE では「妻」が中心に位置し、最も目立っていることから当該カ

28) テイラー『認知言語学のための14章』86頁。F. Ungerer, H.-J. Schmid『認知言語学入門』(第1版、池上嘉彦ほか訳、大修館書店1998)、123-135頁；同中国語版『認知言語学導論』(第2版、彭利貞ほか訳、復旦大学出版社2009)、111-121頁。

29) 「緑」「喜」によって真っ先に連想される典型的なこと。

30) 例えば『現代漢語詞典』(商務印書館第7版、2016)：【老婆】〈口〉妻子。即ち「概念的意味+周辺の意味」の語釈法である。

テゴリーのプロトタイプと認定できよう。これはまた次のような3点によるものである。

1. 意味用法が中性的である；
2. 使用頻度が高い；
3. 難易度の序列では「易しい」ほうに位置する；

つまり「妻」は、当該カテゴリーにある他の語に比べれば、概念的意味が際立っているが、雅俗、評価、文体などの周辺の意味が弱い。そのため他の語より理解しやすいし、よく目にする。言い換えれば使用頻度が高いということである。その当然の帰結として、「妻」は、他の語より易しいか、或いはより基本的な語と考えられる。外国語教育では、語彙に難易度の差を付け、それをそのまま学習の順序として捉える向きがある。筆者は、難易度の差は、同義カテゴリーにだけ存在するものだと考えている。しかし「妻」が概念カテゴリー WIFE においてプロトタイプであることを客観的に証明できるのか。人工物、或いは人為類の場合に用いられるリスト法が有用ではないかと考える。例えば英語の知識が普及している今、「wife の訳語を書いてください」というアンケートの結果に何らかの顕著な傾向性が観察できよう。また「できるだけ wife の訳語を書いてください」と指示すれば、被験者たちが示した同義語の順序に何らかの一致性が認められるのではないか。このような筆者が「訳語刺激法」と称する方法により、日本語を話す人にとって、「妻」が概念カテゴリー WIFE のプロトタイプとしてその心理的実在性を浮き彫りにさせることができる。

前述したように「妻」は、他の語との間に言い換え（家内は、つまり妻である）や語釈（細君は、親しい人に対し、自分の妻をいう語。或いは同輩以下の人の妻をいう語。『大辞泉』）の関係が存在している。プロトタイプによる言い換え、語釈について、国語教育、外国語教育の視点から更に研究を深める必要があると思う。但し筆者は、「妻」のような概念カテゴリーの中心に位置する語はプロトタイプというより、「代表語」と呼ぶ方がよいと考えている。なぜなら同じカテゴリー内の他の語を意味的に代表することができるからである（即ち「言い換え」ができる）。代表語を設けることの最大の利点は、動詞や形容詞の概念カテゴリーについても同様の解釈力を持つことであり、これはプロトタイプ理論では不足しているところである。

動詞：CHANGE の意味を表す言葉に図11のような同義語群がある。まず和漢相通を確認しておきたい。文脈等に応じて和語か漢語を選択する能力は語彙力である。和語には、アラタメルとカエルがある。後者は同訓異字の形で使用されており、漢籍の名残でそれぞれ共起しやすい名詞があるが、日本語にとって本質的には同一語である。一方、漢字語は「改」を含む複合語

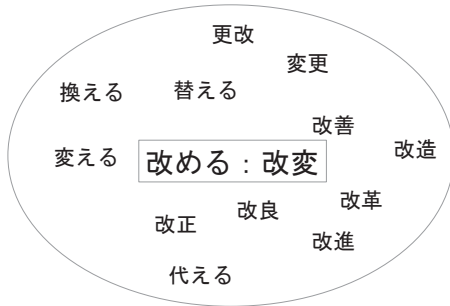


図11. 動詞のプロトタイプ

11に示されたようなプロトタイプがあるのか？動詞の場合も訳語刺激法を利用し、プロトタイプの実在を確認できる。つまり change の訳語を列挙せよという指示に顕著な傾向性が示されるだろうと期待できる。なお、漢字語に関しては、上位回答は中国語、韓国語、ベトナム語も日本語と同じ結果になることが予想される。詳細は、沈国威前掲『漢語近代二字語研究』を参照されたい。

形容詞：図12は、概念カテゴリーBIGを示すものである。それぞれ「大きい」と「巨大」がプロトタイプと考えられる。これに関しては「大きい」は、「-大」を含む一連の漢字語をカバーするもの、或いは漢字語によって精緻化されるものではないかと異論を唱える者もあるだろう。これは和語形容詞と漢語形容動詞全般について言えることかも知れない。すでに述べたように、日本語の形容詞は、和語の範囲内で同義語が少なく、漢語形容動詞によって、表現とコロケーションの多様化を実現している。「巨大」は、「-大」の付く一群の語のプロトタイプ（基本形）と捉えることも可能であろう。

以上の討論を通じて、2種類のプロトタイプがあることを確認した。1つは「一物一名」型

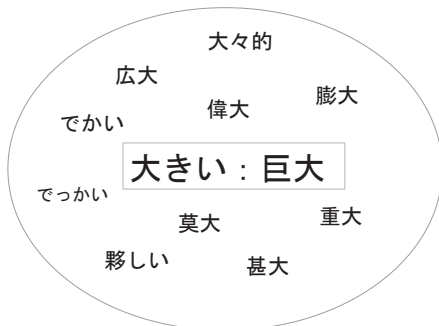


図12. 形容詞のプロトタイプ

をはじめ数多く存在している。概念的意味が同じであっても、ニュアンスやコロケーションに何らかの相違がある場合が多いが、前述したように「改良」と「改善」は、意味、造語形式、構成成分がほぼ同じであるのに何故同時に存在する必要があるのかという問題が付きまとう。二字漢語の多くは新しい意味より新しい語形を提供するのが主な動機付けである。ところで当該カテゴリーには確かに図

の概念のカテゴリーで、言語使用者の百科的知識を反映したものであり、もう1つは、「一物多名」型のカテゴリーで言語使用者の言語的知識によって支えられているものである。両者は互いに絡み合い、浸透しあっているが、混同してはならない。前者はトリのような「類名」で統轄され、後者はツマのような「代表語」で代表される。「類名」と「代表語」は概念カテゴリーのラベル (label) であ

り、語彙体系のノード (node) である。代表語は、語彙論的に見れば、意味が中立的である；使用頻度が高い；より基本的な語と考えられるなどの特徴がある。

「スズメ」が概念カテゴリー鳥のプロトタイプになったのは文化過程であるのに対して、「妻」が概念カテゴリー WIFE の代表語になったのは言語過程である。後者の場合、近代の東西言語接触と語彙交流が、サ変動詞、形容動詞のプロトタイプの形成に重要な役割を發揮した。³¹⁾

荀子の別名は個体に止まっているが、しかし人類の自然界に対する認識は尽きることがないのであろう。科学の進歩に従って、絶えず新発見、新製品が現れてくる。それと同時に人類の活動範囲の拡大に従って、新概念や新しい社会現象も絶え間なく出現するであろう。概念の無限の増加に対応するために、名詞が開放的でなければならない所以である。一方、動詞、形容詞も増加し続けていると予想される。動詞、形容詞の増加がなぜ起きるのか、その新語がどのように既存の語彙体系に組み込まれ、管理されているのか等について知見を深める必要を感じている。すでに紙幅が尽きたので、詳細は次稿に回すことにする。

【付記】 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金：基盤研究C「漢字文化圏における二字漢語動詞と形容動詞の発達と交流に関する総合的研究」(平成30～令和2年度、研究代表者：沈国威)による成果の一部を含んでいる。なお、執筆に当たって、大阪産業大学の紅粉芳恵先生より貴重なご指摘を賜ったことを記して感謝を申し上げます。

31) 沈国威前掲『漢語近代二字語研究』第4章を参照。

